

「辻邦生が見た20世紀末」

辻邦生（著）

信濃毎日新聞社 2000年7月29日刊

本書は昨年7月29日に軽井沢で急逝された作家辻邦生氏が信濃毎日新聞の夕刊に過去10年間週一回載せてこられたエッセイをまとめたものである。本書は丁度一周忌に出版されたもので、辻邦生氏のメッセージが生き生きと伝わってくることに新たな感動を覚えたので、ここにご紹介したい。

辻邦生氏は本業の小説を別にしても、映画、美術、音楽、文学全般にわたる幅広い分野に亘って、随筆、コラムを残されてきた。しかし、時事問題について書かれたものはこれが最初で最後であろう。本書の中で扱われたトピックは多岐にわたるが、10年間というかなり長い期間中に、氏のものを見る視点が全く変わっていないことには驚きを禁じえない。その真のメッセージは、(1)平和の維持の大切さ、(2)生きることの喜び、(3)美しいものに触れる喜び、(4)自然環境の大切さ、その美しさ、(5)世界中の出来事に対する好奇心、(6)スポーツや映画、音楽、芸術をわけ隔てなく愛する健全な精神、ということになるだろうか。

経済学者が新聞や雑誌のコラムに書く内容が時として3ヶ月もすればピントはずれの議論になってしまうのとは対照的に、わが国の古典や西欧文化に対する深い教養に裏打ちされた辻邦生氏の議論は、10年経ってもいささかも風化しないどころか、ますます輝きを増しているように思われる。これらは、小説になる前の辻邦生氏の思想の原点、アイデアの原石、現代人に残したいメッセージの凝縮されたものと言えよう。

具体的に引用してみよう。辻邦生氏は自らの戦中体験を通して、国際紛争の手段としての戦争には断じて反対されている。そして「人類から戦争手段をのぞくこと—この一つのことを世界にくりかえし説くことが、どんなに遠まわりに見えても、日本がやるべき道ではないか」と主張されている(1991年11月29日付)。

また、美しいものについても、耽美派的な美そのものが目的であるかのような立場はとらない。フランスの小説家プルーストを引用して、「彼はきわめて唯美的な世界を創造したが、それにもかかわらず、美の与える快楽だけを追求したのでは美を豊かに味わうことはできない、と言っている。それは、幸福のための幸福追求が倦怠に終わると同じで、美もまた、美の与える喜びよりも、もっと大事なことを愛するとき、そのおまけとして、美的な快楽が与えられる、という」と論じている(1994年6月3日付)。

辻邦生氏がいかに健全で生活という人生で最も基本的なことを大切にされたかということは、「日本の危機とは金融問題もあり、高齢化の問題もあり、家庭の崩壊の問題もある。だが、それ以上に深刻なのは、外国のことが解らなくなり、日本だけが相変わらず、何が生活で真に大切かを感じなくなってしまうことだ。その意味で、今こそ、日本人が、人間にとって何が真に大切であるかを本気で考える時だと思わざるをえない」と書かれていることから明らかだ(1997年3月7日付)。

経済についての見方も明解である。すなわち、「経済は勝手に動くようだが、個人の倫理がその体質を支えていることを忘れるべきではないだろう」ということである(1997年5月23日付)。このような考え方はノーベル賞経済学者のアマーティア・センの考えに通じるものがある。

氏は迫り来る老齢に対しても積極的に立ち向かっておられた。「今日という日のすばらしさに心を高鳴らすかぎり、人は老いるということはない。現代には老人の悲劇は多いが、それを含めて、すべてを感謝をもって引き受けたい。筆者のモットーは『積極的な楽天主義』とっていいかもしれない」(1995年4月21日付)。

氏の真骨頂はこの楽天主義にある。「決して絶望することなく、人間を信頼し、日々よき未来を作ることに努力すること—われわれの道もそれ以外にあらうとは思えない」(1996年2月9日)。評者も全く同感である。一人でも多くの方に一読をお勧めする。